

日本社会の歴史社会学

森 岡 清 美

1. 宗教社会学と家族社会学, どちらが本業か

私はこれまで何度か研究自分史を試みていますので、今回は従来とは異なる切り口で自分史を構成してみたいと思います。さて、私は長らく宗教社会学と家族社会学とどちらが主なのか、と問われてきました。私にとってはどちらが主というわけではない、どちらも本業でしたから、この問いへの回答に窮したものです。研究環境の便宜や周囲の要請によって、ある時には宗教社会学が主で家族社会学が従ですが、環境条件が変わると、この関係が逆転する、という次第でした。従であったほうが主になると、従であった期間の遅れを取り戻す努力をすぐに開始していましたから、二つの領域ともにまずまず最新の研究水準を維持することができたように思います。

このような状態はいわゆる二兎を追うものでありまして、研究を深めるためにはよいことではありません。私とて、好んでこのような事態に身を置いたわけではなく、成り行きでそんなことになってしまったのです。その辺のところをご理解いただくには、研究自分史の初期にたち戻らねばなりません。

私は東京文科大学哲学科倫理学専攻の卒業にさいし、郷里伊賀の山村とそこに発する服部川という川（淀川の源流の一つ）に沿う村々の調査に基づいて、「日本農村社会の一類型」と題する、学部学生の分を超えた長さの論文（186枚）をまとめました。これは鈴木栄太郎先生の『日本農村社会学原理』[1940]の概念枠組に依拠した、むしろ「農村社会の累積的構成」とでも題すべき論文です。その第1部が当時の日本社会学会の機関紙『社会学研究』に指導教授岡田謙先生の推薦で掲載されましたが[1948]、荒削りの未熟な試みで、論文としてはまことにお粗末でした。それでも、自己流の初めての現地調査による手習い的な実証研究の経験、郷里の村に連なる村々を鈴木流の第一、第二、第三社会地区の観点から調べた経験は、その後の私の農村理解の基礎になったに違いありません。

東京文科大学の倫理学専攻には社会学の学生は私一人でしたから、独力で研究主題と調査対象地を求めなければなりません。卒業した1948年には、郷里から一山越えた村に調査

地を求め、春日神社という鎮守の、長屋祭という名の特権的宮座を村落の社会構成に関連させて調査し、「宮座と村落社会の構造」という論文(110枚)をまとめました。日本史家肥後和男先生の宮座研究[1941]の、民俗学的な伝播パラダイムに対して、社会人類学的な機能主義パラダイムの立場からこれを批判する意図を込めた、現地調査に基づく実証研究[1954]です。宮座および宮座を支えた郷土(無足人)層に関する在地の文書資料と、キーパーソンに対する面接調査が主な資料源でした。この研究によって、集落とそこに所在する神社との関係についての、私の理解の土台が築かれたように思います。

翌1949年には、当時日本の社会学界を席捲していた同族団研究に私も参入したい思いにかられて、仏教教団の構成の研究に着手しました。同族団を構成する本家分家関係についての知見を拠所に、仏教教団の本山末寺関係を分析することによって、同族団研究に新しい地平を開けないものだろうか、と考えたのです。対象は子どもの頃から親しんだ浄土真宗の教団とし、郷里三重県に末寺が多い真宗高田派を選びました。これなら親戚のネットワークによって調査費をあまりかけずに現地調査ができます。寺院住職に対する面接調査と寺院所蔵の文書資料を主な資料源として、「仏教教団の構造」なる論文(162枚)をまとめました。この論文が後に枝葉を繁らせて大きく育つ胚子となったことは、未刊に終わっただけに、特にふれておきたいと思います。

1949年末から50年にかけて、国際基督教大学研究所で机を並べた東京大学の教育学専攻大学院生古銭良一郎氏(後、青山学院大学教授)の誘いで日本基督教団教育委員会の研究会に加わり、この委員会の依頼によって教会教育の観点から福島県伊達教会と群馬県島村教会の調査を実施しました。古銭氏と共同で行った伊達教会の調査はものになりませんでした。単独で何度も訪ねた島村教会のほうは、文化人類学の文化接触の視角からまとめることができ、日本民族学協会の機関紙『民族学研究』の巻頭論文[1953b]として過分の評価をいただきました。これが機縁となって、地方小都市プロテスタント教会の調査をつづけることになります。

このように、私の研究生生活の初期は宗教団体の調査によって彩られています。集落神社は田舎の子どもにとって遊びの空間に接続した親しい施設であり、真宗寺院は真宗門徒の子どもにとってこれまた遊び空間の一部を占めるものでした。キリスト教会のほうは青年期の生きる悩みに答えてくれた集まりでした。したがって、神社も真宗寺院も、またプロテスタント・キリスト教会も、何の違和感もない存在でしたから、調査費の心配をせずに調査できるという条件があれば、つぎつぎと取り上げてゆくことになったのです。他の社会学研究の対象よりも、宗教に係わりのあるもののほうが私の好みに合ったから、あるいは研究の意義が大きいと思ったからではありません。私の研究自分史の初期に顕著だった宗教社会学への傾斜は、おおむね機縁の然らしめるところであって、研究上の強い内心からの要請によるもの

とはいえません。

その後1952年から2年間、九学会連合という人文科学の学際的研究団体の「能登調査」に参加できたことが、私の真宗教団研究を加速させました。加えて輪島市町野町金蔵の正願寺で真宗教団の基礎構造とでもいうべき本坊子寺関係を発見したことが、私の研究努力を教団構造の解明に集中特化させることになりました。こうして主に本州中央部諸県の真宗寺院住職に対する面接調査と寺院文書の発掘の成果が、1960年に『真宗教団と「家」制度』と題する学位論文となり、1962年に刊行されました。この本で、宗教社会学者としての私の評価が確立したといってさしつかえありません。

他方、家族研究の開始は遅れました。1952年3月、東京文理科大学専任講師に昇任し、4月から授業を担当することになったのですが、社会学の組織的な勉強をしてこなかったもので、掲げるべき授業科目がないことに気がつき、3月に入ってから慌てて準備を始めました。東京教育大学教授の有賀喜左衛門先生から、農村社会学の講義なら新しいところをやってほしいと言われ、鈴木先生の著書を通してかねて関心をもっていたアメリカの農村社会学について講義することにしました。しかし、講義をするからには、アメリカの主要なテキストの勉強からし直さなければなりません。そこで選んだのが、ネルソン (Nelson, L.) の *Rural Sociology* [1948] という新着のテキストでした。読んでいて気がついたのは、農場家族 farm family のライフサイクルに関する研究業績が、アメリカの農村社会学にはたくさん蓄積されていることでした。かつて卒業論文の準備にとりかかった時、岡田先生から「鈴木さんのようなこと [鈴木 1940, 1942] はやれないかね」と言われたことが頭のどこかに残っていたのでしょう、ネルソンを手がかりとして家族のライフサイクルについてまとめようと思いました。この思いが、その頃読んだマードック (Murdock, G. P.) [1949] やレヴィ (Levy, M.) [1949] から受けた新鮮な刺激と結合して、家族周期に関する私の最初の論文「家族研究の一視角 - 家族周期の理論と方法 -」 [1953a] が成立し、私の家族研究を特色づける分野の開拓が始まります。

家族研究について忘れることができないのは、1950年に労働省婦人少年局婦人課の「農村婦人の生活」調査に参加したことです。主査はGHQ (連合軍総司令部) のCIE (民間情報教育局) 勤務の竹内利美氏 (後、東北大学教育学部教授)。協力者として東京大学助手の塚本哲人氏 (後、岩手県立大学副学長)、東京大学大学院学生 of 杉政孝氏 (後、立教大学社会学部教授) と私 (東京文理科大学助手) が加わりました。当時農村調査ができる若手が少なかったこともあって、東京大学助教授 (後、教授) の福武直先生が私を推薦してくださったのです。労働省のほうは局長が山川菊栄氏、婦人課長が後に社会党の参議院議員になった田中寿美子氏、そして4月に入省したばかりの女性事務官として紹介された一人が後に法務大臣になる森山真弓氏でした。竹内さんがCIE仕込みの最新の技法を導入して調査を企画し

てくれたお蔭で、社会調査のまともな訓練を全く受けていなかった私は随分勉強させてもらいました。農村婦人生活調査の柱は何といても家族ですから、この調査に参加して4ヵ村の調査に携わったことが、家族の現地実態調査を自分で実施する基礎固めになったと思われま

す。この直後1951年から53年にかけて、ユネスコがらみで組織された「社会的緊張」に関する学際的共同研究の、「家族生活における緊張」研究班に班長の岡田先生の指示で加わって、実態調査を長野県と山梨県の2地点で実施しました。長野県では、アメリカの社会心理学的な家族研究文献からヒントをえて、中学生とその家族の人々との心理的距離を測定する実査を試み、山梨県では、個人的記録の資料的価値についてのブルーマー(Blumer, H.)らの検討[1939]に学んで、中学生に作文を書いてもらって分析するなど、新しい技法にも挑戦しました。

この後1953年から54年にかけて、日本社会学会の農村SSMと通称される共同調査が有賀先生を委員長として実施され、私は事務局を担当して和歌山県・福岡県・山梨県での3ヵ村の調査にたずさわりました。研究の焦点は村落の階層構造とその変化の解明でしたが、農家が村落構成の単位として注目されたのはいうまでもないところです。この共同研究のさいに多くの先輩の知遇をえ、仲間づきあいをしてもらう端緒となりました。シニア層は有賀先生の他、小山隆(大阪大学教授)・喜多野清一(九州大学教授)・臼井二尚(京都大学教授)、中堅層は福武直・内藤莞爾(後、九州大学教授)・甲田和衛(後、放送大学学長)・山本登(後、大阪市立大学教授)、ジュニア層は塚本哲人・西田春彦(後、大阪大学教授)の諸氏と私で、さらに若い大学院生クラスの方々も動員されていました。

ついで1956年から4年間、岡田先生がアジア財団の委嘱を受けて、岡山県高松町新池で農業機械化の社会的経済的影響に関する調査を行うこととなり、事務局を担当した私は業務の遂行を通して農業経済学など他分野の専門家と懇意になりました。農業経済班の提案により1957年から農家8戸の協力で実施した生活時間記帳は、家族研究の技法としても優れたものですが、2ヵ年の長きにわたって継続しえたことについては、3ヵ月交替で現地に駐在して調査に当たった東京教育大学大学院学生柿崎京一氏(後、早稲田大学教授)、東京大学大学院学生川本彰氏(後、明治学院大学教授)の労に負うところが大でした。

1955年に東京都立大学に移った前記の小山氏が家族問題研究会を組織し、56年から57年にかけて、東京都下山村・区内アパート団地・都下近郊村の3地点で「現代家族の実態」[小山1960]と題する共同研究を実施しました。京浜地方の家族研究者が挙って参加したのですが、私は自分自身の研究関心の追究で精一杯だったため、ごく周辺的なお手伝いでご免こうむりました。時期的に重なっていた農業機械化の調査では、研究チームの企画運営から会計処理、アジア財団への年次報告まで担当しましたが、同じ理由でコミットすることは免除して

もらっていたのです。こうして、1955年頃から真宗教団の研究に専念し、その成果が1962年に出版されてさきほど言及した私の代表作となりました。他方、家族研究のほうはまだまだ副業的な地位に止まっていました。それでも、家族社会学領域の研究文献の整理や、整理に基づく新しいアイデアの提出（例えば、家族の種類と分類、類型ごとの周期パターン）は精力的に進めていましたので、紛れもない家族研究の専門家として社会学会の家族部会のオーガナイザーなども勤めたのですが、調査もしないでアイデアばかり展開しているのではどうも、といった批判がありました。私は真宗寺院の実態調査のために家族調査の時間がなかったのだし、何らかの新しいアイデアが司令塔になっていないような調査では、学術的な意味が乏しいと考えていましたので、こうした批判にもへこたれませんでした。

1960年に真宗教団研究に一区切りがついて渡米し、ミシガン大学日本研究所の客員所員として1年間滞米した頃から、私の研究領域のなかで家族社会学が主要な地位を獲得する機縁が重なりました。その一つは、1958年から59年にかけてフルブライト研究教授として来日し、東京教育大学の私の研究室で机を並べた *Husbands and Wives: The Dynamics of Married Living* の著者・家族社会学者のミシガン大学準教授ブラッド氏 (Blood, R. O., Jr.) による啓発と感化、第二は在米中に始まった世界的な家族社会学者ヒル氏 (Hill, R.) との交渉です。第三の、そして最も重大な機縁は、帰国して漸くアメリカほけから立ち直った1963年7月、アメリカから帰朝早々の小山先生の要請で、国際社会学会家族研究委員会 (Committee on Family Research, International Sociological Association) の第9回国際家族研究セミナーを東京に招致するために協力する羽目になったことです。これは委員長の小山先生から手紙で依頼されていたことでもありました。

セミナーは欧米を中心に世界各国から代表的な家族研究者33名、国内から家族研究者以外に社会学界の権威を加えて約60名、合わせて100名近い規模で、1965年9月1週間にわたって成功裡に開催され、一流の社会学者の来日と日本の社会学界としては初めての本格的な国際研究集会であったことから、大きな反響がありました。準備委員長の小山先生は総括と会計、事務局長の私は企画・庶務・渉外という分担で、セミナーの準備と遂行に全力を傾注した1964・65の2ヵ年でした。セミナーの開催を通じて海外の第一級の学者と懇意になりましたが、とくにヒル先生の知遇をえたことが、私の家族周期研究の国際的展開を可能にするという、予期しない恩恵を受けることになります。

第四の機縁は、国際家族研究セミナー開催の65年にやってきました。その年、特殊法人社会保障研究所が開設され、研究所を拠点とする児童養育費調査に、主力メンバーの一人として参加することになったことです。私が発表してきた家族研究、とくに家族周期関係の文献整理が評価されたからですが、中鉢正美氏 (慶応義塾大学教授) を主査とするこの研究グループが4ヵ年にわたって実施した、家族周期段階を切り口とする児童養育費調査から、貴

重なる資料と知見を獲得することができました。外は国際的ネットワークからの学術情報と、内は児童養育費調査からの資料によって、私の家族周期研究は急速な展開を遂げ、1973年の『家族周期論』に結実したのです。1967年の編著『家族社会学』によってほぼ固まっていた私の家族社会学者としての地位が、ここに確立したといえましょう。こうして、宗教社会学と家族社会学をともに専門領域、いわば本業とするという形、二兎を追う形が出現したのです。

宗教社会学への傾斜は、研究の機縁もさることながら、私が敬虔な真宗門徒の家に生まれ、長じて内心の要請からキリスト教に入信したことがあるという、宗教経歴のゆえといえましょうし、家族社会学のほうは、大学時代の指導教授岡田先生が日本の家族社会学の創始者戸田貞三先生門下の逸材で、『未開社会に於ける家族』[1942]の著者であったことと無縁ではないでしょう。しかし、私の研究経歴を辿ってみると、宗教も家族も、ぜひこれを研究したい、しなければ、という切実な思いから取り上げたのではないことが判明します。その点では、宮家準氏における修験道研究と同日の談ではありません。私が背負った研究環境の制約のなかで、機縁が重なって、いわば成り行きでこうなった、という思いが深いのです。切実な主体的要求があって専門領域としたのなら、そこから離れることなどないはずですが、1994年淑徳大学に採用される頃に宗教社会学から離れ始め、今では足を洗ったような気持ちになっています。のみならず、家族社会学からも遠ざかっている自分に気がつくことがあります。近年の私の研究関心の所在を顧みる時、成り行きで宗教へ、そして家族へと漂い来たり、今や家族からも遠ざかっている、との思いが深いのです。

2. 歴史学と社会学の間

では、私は何を研究したかったのだろうか、そう自問してみます。まだ成り行きでがんじがらめになっていない初期、つまり宗教社会学といわれる領域の研究を始めていた頃、研究対象とした時代を点検してみますと、神社神道は近世・近代・現代、仏教も近世・近代・現代、キリスト教は近代・現代となります。現代よりは近代に中心があり、しかも史料があるかぎり近世からの展望のなかで取り上げています。つまり、最初から歴史学的接近をしてきたこと、たまたま宗教という領域を対象としましたが、宗教そのものよりはどうも歴史に関心があること、がみえてきます。宗教領域の研究は私が社会学専攻ということで宗教社会学の業績といわれていますが、むしろ宗教史、とりわけ宗教集団史といってよい研究をしていたこととなります。

私はどういうわけか早くから歴史に関心をもっていました。そこで、東京高等師範学校へは歴史と地理が専攻の文科四部を志望しましたが、各地の物産を暗記させるだけの地理教科書に嫌気がさしたことなどあって、入試では志望を変えて修身公民専攻の文科一部に入りま

した。そうすると、東京文理科大学への進学の本コースは教育学か哲学になるので、高師時代の担任の伊藤栄四郎先生の強い感化と、他方、善に関する私の内面的な悩みの解決を求めて、哲学科倫理学専攻に入学しました。ところが、戦争が終わってキリスト教に接する機会ができ、私の悩みがキリスト教によって解決可能だと分かった後、人間の内側に向かう倫理学よりも、社会現象の理解を志す社会科学を選ぶべきだと考えたのです。そして、文理科大学に留まって社会科学を学ぶからには、他大学では学部を構成する法学や経済学よりもせいぜい学科にすぎない社会学のほうが、他日他大学出身者と競争する場合ハンデキャップが少ないだろう、というまことに世俗的な判断から、倫理学教室配属で社会学担当の岡田謙先生を指導教授と仰ぐこととなりました。その直接の契機は、敗戦で復員して間もない頃、先生から受けた最初の講義「社会調査」がカントの原書で苦しんだ身にとってたいへん分かりやすく、これなら私もやれそうだと思ったことでした。

歴史学志望を自ら放棄して社会学を選んだことは、予想もしない幸運をもたらしました。当時、大学を卒業し研究科に身を置いても、講座制の教員組織のなかでは、専任講師以上の大学教員のポストにはそう簡単に就くことができませんでした。私の4年先輩で15年も日本史教室の助手をした人がいますし、倫理学の2年先輩二人も長い間助手をしていました。ところが、私は特別研究生2年で助手に採用され、助手2年で専任講師に昇格し、さらに講師2年半で助教授になるという、破格の幸運に恵まれたのです。いいかえれば、私が学部学生の時に助手であった人が、私が助教授になった時、やはり助手をしていた、という、講座制をとらぬ私立大学では考えられない非情な事態です。先輩が不遇を託つなか、私がどうしてこういう幸運に恵まれるのか。—これは教員の需要供給のバランスで説明することができるように思います。日本史学や倫理学では教員のポストが全く増えず、老舗ですから教員候補はどしどし育成されるという、供給過剰の状態でした。他方、社会学は戦後の大学改革のなかで一般教養の選択必須科目に加えられ、どの大学でも社会学担当教員を求めましたが、教員候補の育成が追いつかず、甚だしい供給不足に陥っていました。大学看護科教員の絶対的不足のなかで、修士の学位をもっておれば助教授として迎えられる今日の事態に似たことが、社会学でも新制大学発足期に発生したのです。私は歴史学でなく社会学を選んだがために、幸運が向こうからやってきたのでした。

私は東京文理大・東京教育大の28年間、文学部社会科学科社会学専攻配属の教員らしく、社会学者として振舞いました。人は私の宗教集団史研究に宗教社会学のラベルを張ってくれました。家族社会学が私の主領域となるにつれ、その研究対象の時代は現代ですから、いっそう社会学者らしくなりました。こうして、日本社会学会の理事に三度選出され、国際関係担当あるいは機関紙編集担当の責任を負ったばかりか、日本社会学会を代表して国際社会学会の理事にも選ばれ、社会学の世界で「活躍」したのです。

1978年、東京教育大学が筑波紛争がらみで廃学となったとき、日本宗教史家堀一郎先生の招きで成城大学文芸学部に着職し、文化史学科に所属することになりました。社会学者の文化史学科教員など似合わない、というのが大方の反応かもしれませんが、大手を振って歴史研究ができる幸せな巡り合わせと私は内心喜び、四度目の日本社会学会理事を勤め終えた1985年には、もうこれで社会学は卒業したと、サバサバした思いでした。4期理事を勤めますと被選挙権がなくなり、もはや理事に選出される可能性がなくなるからです。ところが1988年、日本社会学会の理事会で次期会長に選出されたから受けてほしいとの、思いがけない電話が会長職の作田啓一さんからありました。会長は理事の互選で選ばれるのですが、理事でなくても会長に選ばれることがあり、私は理事ではなかったのですが、会長に選ばれてしまったのです。折角、社会学から脱出できると思っていたのに、会長になれば社会学から逃げるわけにいかず、図らずも社会学に引き戻されてしまいました。3年たって会長の任期が終わる頃、日本社会学会を始めとする日本の社会学関係の学協会全体の代表として日本学術会議会員に選出され、結局社会学のなかに身を置いたまま、成城大学の定年を迎えました。定年退職の後は歴史学に専念しようと考えなくてはなかったのですが、直ちに淑徳大学社会学部に嘱託教員として採用されたため、社会学者を廃業することなく年を経ることになります。

このように見てきますと、私は本当は歴史学をやりたいのに、職業として社会学専攻や社会学科に、あるいは社会学会に身を置いたために、社会学者として振舞ってきた、ということになります。私がやってきた家族社会学は社会学といえませんが、宗教社会学のほうは社会学というよりは宗教集団史研究で、実は歴史学ではなかったか、と思うのです。私の研究における宗教社会学と家族社会学とのせめぎ合いは、実は自らの好みとしての歴史学と、職業がら付き合ってきた社会学とのほざ間で、格闘する姿ではなかったか。そう考えてみると、自分のことが少しよく分かる感じがしてくるのです。

では、歴史学と社会学とのほざ間とはどのような研究空間でしょうか。私はこれに歴史社会学という名称を充て、歴史社会学を自称する既存の研究が歴史社会学をどのように規定しているか、調べてみました。

京都大学の社会学関係者による戦時下日本社会研究会編『戦時下の日本－昭和前期の歴史社会学－』という、1992年に刊行された本があります。歴史社会学で売り出した筒井清忠氏の「まえがき」によれば、歴史社会学とは、社会学的視角を摂取した歴史研究です。しかし、定義のなかのキー概念である「社会学的視角」とは何か、「摂取する」とはどういうことか、説明がありません。これでは、定義としては不十分で使えません。

海外ではhistorical sociologyといいます。T. スコチボル編著Skocpol, T. (ed.), *Vision and Method in Historical Sociology*, 1991, を経済史の小田中直樹氏が訳した『歴史社会学の構想と戦

略』[1995]によると、理論を歴史的事実に適用するだけでなく、逆に歴史的事実の叙述のみを事とするのでもなく、理論から事実へ、事実から理論へと、理論と歴史的事実との接合を意図する営みが歴史社会学で、比較法に関心が注がれるのだそうです。何となく分かる気もしますが、どうしてこれが「社会学」なんだろうという思いを禁じえません。

そう思って同じ1995年に出版された園田英弘ほか編『士族の歴史社会学的研究－武士の近代－』を見ますと、同意できる記述があります。

序章で園田氏は、「歴史社会学とは、ミクロ・マクロな視点から歴史の変化の趨勢を、社会学の理論や概念を用いながら明らかにしていく社会学の一つの立場」(37頁)と規定します。その上で「社会学者の手で<歴史研究>として書かれるものは、歴史家が明らかにした断片的な諸事象や諸命題をある社会学理論に沿って整序し、一つの歴史像や社会変動のモデルを構築するというものが多い」ことを指摘し、「それらの中には往々にして、ある社会学理論の中に、事実を恣意的に押し込む結果になっている」(38頁)と批判しています。

園田氏は、ベラーの有名な著作Bellah, R. N., *Tokugawa Religion: The Values of Pre-Industrial Japan*, 1957, が念頭にあってこの批判の文章を書いたようです。確かにベラーはパーソンズのAGIL理論を徳川期の社会および宗教とりわけ心学に適用して、徳川期の宗教理解に新機軸を開き、丸山真男氏なども賞賛したので評判になりました。ベラーによるパーソンズ理論の適用は、パーソンズ理論の解説になっているので、私にとってその点では有益でしたが、徳川期の宗教の理解は日本の内側からの考察を深めるのでなければ達成できない、という思いをかえって強くしました。そこで、園田氏の文章を、「ある<欧米で構築された>社会学理論の中に、<日本の>事実を恣意的に押し込む結果になっている」と、失礼ながら手直ししてこれに賛成するものです。

園田氏は、「壮大な社会学理論もしくは社会変動理論に照らして歴史的事実を整序するという、研究方法をとらない」(39頁)と言明します。これにも先につけたのと同じ限定を冠して賛成します。このことは、もし日本で生まれた社会構造理論あるいは社会変動理論があるなら、それを日本の歴史的事実に適用することを試みる余地があることを、含蓄するものです。もちろん西洋生まれの社会学理論で日本の社会事象に適用可能なものも少なくありませんが、例えばホマンズの「人間集団論」Homans, G. C., *The Human Group*, 1950,などは、あまりにも基礎的で歴史的事実に適用してもさほど意味がないのではないのでしょうか。

園田氏は、オリジナルな史料を用いて、事実の発掘とそれを命題へと一般化することを目指していると言い、歴史を分析する上で利用するのは社会学の命題や理論体系ではなく、社会学的な方法や概念であり、あくまでも分析対象に即してアド・ホックに用いると言って、冒頭概念規定の意味を敷衍しています(39頁)。私のいう歴史社会学の内容もこれとほぼ同じですが、あえて付け加えるなら、史料もそれによって発掘した事実も、歴史の文脈から

切り離さず、その中に据えて考察する、という点を強調したいと思います。私が手がけてきた宗教社会学も、また家族社会学さえ、このような意味での歴史社会学であったのではないのでしょうか。因みに園田氏らは東京大学系の教育社会学畑の研究者です。

なお、私の研究を歴史社会学とって社会史と呼ぶのを控えてきたのは、社会史は経済史・政治史などと並ぶ歴史学の一分野であり、私のは歴史学と社会学が交差する境界領域と考えたからです。しかし、今は社会史に歴史社会学と同義の社会史があることを容認し、社会学的社会史は歴史社会学と同義とみる立場をとっています[森岡 2005: はしがき iii]。

3. 歴史社会学の実績

歴史社会学における私の実績を、園田氏の指摘に従って、どんな社会学的な分析手法や概念を歴史研究に用いたか、歴史的事実の発掘に基づいてどんな社会学的概念を鑄造し、どんな命題を設定したか、の2点について点検したいと思います。

まず、分析手法としては、ライフサイクルとかライフコース、概念としては、イエ、世代、コーホート、喪失 deprivation、集合行動などを挙げることができます。社会学が借用したものです。機能主義アプローチ、文化接触、文化変容を付け加えることができます。これらの分析手法や概念によって、並みの歴史学者とは一味異なる分析ができたように思います。

新しい概念の鑄造としては、夫婦家族制・直系家族制・複合家族制という家族の3類型、夫婦家族・直系家族・複合家族という家族の3分類、修正直系家族、直系制複合家族、異居近親関係、同居・分居・散居という親子居住関係の3分類、巨大イエ・大イエ・中イエ・小イエという入籠関係にあるイエ、主従結合型・与力結合型・組結合型というイエ結合の3分類、いえモデル・おやこモデル・なかま官僚制連結モデルという宗教組織の3類型、外来宗教定着の3レベル（個人・集団・制度）、などを列挙することができます。

命題としては、上記の概念を用いて変化の方向を示す命題を設定しています。直系家族制から夫婦家族制へ、複合家族制から直系家族制あるいは夫婦家族制へ、巨大イエ・大イエ・中イエの解体、大イエから小イエへ、いえモデル・おやこモデルからなかま官僚制連結モデルへ、などがそれです。イエの変化についての命題は日本社会限りですが、家族類型の変化に関する命題は日本社会を超えて広く適用されうるのではないかと考えております。新しい概念の鑄造と、それによる変化の方向の想定は、研究対象と同種の現象に広く妥当する知見に到達しようとする、社会学固有の志向を示すものといえましょう。

このように関連づけてくると、職業がら社会学に留まらざるをえなかったことが、私の歴史研究をユニークなものにしたことが明らかです。他方、社会学に留まりながら歴史研究への思いを断つことができなかつたがために、私の社会学研究が構造に加えて変化の動態を具

体的な歴史の中で取り扱うことになったように思われます。もし楕円形の二つの中心の緊張関係が創造への動力を生み出したのであれば、成り行きから陥った二兎を追う研究生生活はむしろ幸いなものであったのかもしれない。

4. 歴史社会学の焦点—日本社会論—

最後に聞きたいと思うのは、私の歴史社会学的研究の焦点がどこに在るか、ということである。家族なのか、宗教なのか、再び最初の問題に還るのですが、これにはどちらかといえばノー、と答えたい。では、焦点はどこに在るか？ それは端的に言って日本社会論ではないだろうか。家族も宗教も、日本社会の研究に迫る切り口であったのではないか。それが淑徳大学最後の年に『華族社会の「家」戦略』を世に問うた頃の私の自己認識です。宗教研究から遠ざかったのは、淑徳大学では宗教社会学を担当しなかったから。家族研究から遠ざかったのは、家族社会学会の活動から遠ざかったから。日本社会論に落ち着いたのは、この題目の授業を淑徳大学で一貫して担当したから、ということもあるかもしれませんが、ともあれ私にとっては幸運な成り行きだったと思います。

私の還暦記念として20年近く前に刊行された『近現代における「家」の変質と宗教』という本のなかで、私は初めて「わが研究遍歴の回顧と展望」をサブタイトルとする一文を書き、その末尾をつぎの文章で締めくくりました。

わたしにおける家族研究と宗教研究の実質的な統合の見通しは暗いというほかないが、家族を通し宗教を通して日本社会の研究を推進してきたのであるから、日本社会研究という一段と高い次元で二つの道がからみあっていることになる。さらにいえば、二つの研究対象を持つことにより、何れの一つにも埋没することなく、両者に共通するもの、すなわち日本社会の社会学識の達成という目標が、かえって鮮明になるように思われる。よしその達成がいかほど困難であるにしても、わたしの最終目標はそのあたりに設定されなければならないのであろう。[森岡 1986:394]

5年前に、私の喜寿記念として『出会いの知的生態学』なる冊子が編まれたとき、私は「大学教員50年」（2000.2.10稿了）なる一文を草し、その末尾に上記引用の文章を掲載しました。これを手がかりとして、還暦記念から喜寿記念に至る15年間の研究の展開を総括し、「細部でなく大きく全体を眺めるなら、予想どおりの展開といえるのではないだろうか。」「森岡清美 2000:16」と書いたのですが、かつて幻であった展望が、『明治キリスト教会形成の社会史』（2005）を刊行した今、私の日本社会論は天皇家巨大イエつまり近代天皇制の研究に収斂するという見通しの形で、明白に見えてきた思いがするのです。ようやく私本来の目標ははっきりしたことは、研究生生活継続60年の賜物かもしれません。ともあれこれが、すでに始まっている書齋を拠点とする孤独な研究活動の指南車となることでしょう。

付記 この原稿は元来、2002年3月末をもって本学専任教授の職を退くにあたり、最終講義の機会を与えられて準備したものである。しかし、研究自分史を語るよりはもう少し一般的な話題について述べるほうがよいと思い直して、「忘れえぬ日本社会学の先人たち－有賀喜左衛門・小山隆・福武直－」（『淑徳大学大学院研究紀要』9号掲載）、という内容の話をし、旧稿はそのまま篋底に眠ることとなった。今回幸い旧稿もようやく日の目が当たることになった機会に、これに改訂追記したことはいうまでもない。（2005.9.19）

文 献

- Bellah, R. N., 1957, *Tokugawa Religion: The Values of Pre-Industrial Japan*. The Free Press.
- Blood, R. O., Jr. and Wolfe, D. M., 1960, *Husbands and Wives: The Dynamics of Married Living*. The Free Press.
- Blumer, H., 1939, *Critiques of Research in the Social Sciences, 1: An Appraisal of Thomas and Znaniecki's The Polish Peasant in Europe and America*. Social Science Research Council, Bulletin 44.
- 肥後和男, 1941『宮座の研究』弘文堂。
- Homans, G. C., 1950, *The Human Group*. Harcourt Brace Jovanovich.
- 小山 隆編, 1960『現代家族の研究－実態と調整－』弘文堂。
- Levy, M. J., Jr., 1949, *The Family Revolution in Modern China*. Harvard University Press.
- 森岡清美, 1948「同族結合に関する一試考」日本社会学会『社会学研究』2:1, 73-88.
- 森岡清美, 1953a「家族研究の一視角－家族周期の理論と方法－」最高裁判所事務総局『家庭裁判月報』5:2, 39-80.
- 森岡清美, 1953b「日本農村における基督教の受容」日本民族学協会『民族学研究』17:2, 1-14.
- 森岡清美, 1954「村落の階層構造と宮座」東京教育大学『社会科学論集』1, 110-161.
- 森岡清美, 1962『真宗教団と「家」制度』創文社。
- 森岡清美編, 1967『家族社会学』有斐閣。
- 森岡清美, 1973『家族周期論』培風館。
- 森岡清美, 1983『新しい家族社会学』培風館。（望月嵩と共著）
- 森岡清美編, 1986『近現代における「家」の変質と宗教』新地書房。
- 森岡清美, 1987『近代の集落神社と国家統制』吉川弘文館。
- 森岡清美, 1989『新宗教運動の展開過程』創文社。
- 森岡清美, 2002『華族社会の「家」戦略』吉川弘文館。
- 森岡清美, 2005『明治キリスト教会形成の社会史』東京大学出版会。
- 森岡清美先生寿喜記念誌編纂委員会編, 2000『出会いの知的生態学－森岡研究室からの出発－』。（非売品）
- Murdock, G. P., 1949, *Social Structure*. Macmillan.
- Nelson, L., 1948, *Rural Sociology*. American Book.
- 岡田 謙, 1942『未開社会に於ける家族』弘文堂。
- 労働省婦人少年局編・発行, 1952『農村婦人の生活－実態調査結果報告－』。
- 戦時下日本社会研究会編, 1992『戦時下の日本－昭和前期の歴史社会学－』行路社。
- 園田英弘ほか編, 1995『士族の歴史社会学的研究－武士の近代－』名古屋大学出版会。
- スコチボル, T. 編・小田中直毅訳, 1995『歴史社会学の構想と戦略』木鐸社。
- 鈴木栄太郎, 1940『日本農村社会学原理』日本評論社, 258-262.
- 鈴木栄太郎, 1942「日本人家族の世代的発展に於ける周期的律動性に就いて」戸田貞三・鈴木栄太郎編『家族と村落』2, 1-50.

A Sociology-Oriented Historical Study of the Japanese Society

Kiyomi MORIOKA

For long, my field of study was split into two distinctive areas of sociology, that is, religion and family. I never intended to do so, but I was led to this way of study due to environmental conditions of my career. My colleagues and friends continued to ask me which was my major field. I used to answer them that one of the two was major at one time and the other at the other time. I enjoyed exciting intellectual stimuli stemming from both disciplines, rather than was troubled with the repeated shift between the two foci of concentration.

After the passage of my academic career covering nearly 60 years, however, I found the two areas having converged upon a sociology-oriented historical study of the Japanese Society. In other words, my keen interests and accumulated scholarship in the Japanese history, the Japanese *ie* system and religion have come together to work in a common ground of the modern Emperor System study. But I realize that it is still far distant to reach any meaningful integration.